

国連スーダンミッション（UNMIS）派遣要員・UNMIS職員へのインタビュー
—スーダンの平和を支える日本人の活躍—

インタビュアー：

国際平和協力室インターン 岩崎久美子（いわさきくみこ）

早稲田大学大学院政治学研究科修士1年

2009年9月現在、日本は、ゴラン高原、ネパール及びスーダンに展開する国連平和維持活動（PKO）及び政治ミッションに自衛官を派遣しています。また、こうした国連のミッションで活躍する日本人職員もいます。しかし、こうした日本人の活躍や国際社会の平和を維持する手段としてのPKO等国連の活動の実態は、必ずしも国民によく理解されているとは言えないと思われます。また、国際協力分野に携わることがを希望する日本人は多くいますが、PKO等で活躍している人々について知る機会に乏しいことから、こうした活動に携わることを選択する方は少ないとの見方もあります。

スーダンでは、20年以上の内戦を経て2005年に南北包括的和平合意（CPA）が署名され、同年、この和平合意の履行の支援を主任務とするPKO、国連スーダンミッション（UNMIS）が設置されました。

そこで今回は、このUNMISの活動をはじめスーダンの平和を支えている日本人の活躍に焦点をあてたいと思い、UNMIS司令部の兵站幕僚として派遣された陸上自衛

隊の^{たなかひろのぶ}田中裕宣二等陸佐、外務省が立ち上げた[平和構築人材育成事業](#)^(注)の第2期（平成

20年度）修了生で、現在、UNMISの職員として選挙支援を担当する^{さいとうまさこ}齋藤昌子さん、

防衛駐在官として在スーダン日本大使館で勤務された^{くにいまつじ}國井松司一等陸佐の3名の方に、お話を伺いました。（岩崎）

（注）平和構築人材育成事業は、文民の平和構築の担い手の養成を目的として、平成19年度より外務省が立ち上げた人材育成事業です。この事業は、国内研修、海外実務研修及び就職支援を柱として、外務省の委託により「広島平和構築人材育成センター（Hiroshima Peacebuilders Center: HPC）」が中心になって、国連ボランティア計画をはじめとする国際機関、NGO、海外の関係機関と連携して実施されています。この事業の修了生は、すでに東ティモール、スーダンなど、世界各地の平和構築の現場で、国際機関やNGO、政府機関等の一員として活躍しています。

（参考）国際平和協力室に配属されたインターンは、PKOに関する調査・分析、報告

書の作成に加えて国際平和協力業務関係の広報活動（インタビュー）を行っています。



インタビュアー：岩崎久美子

＜田中裕宣二等陸佐(平成20年10月から平成21年4月までUNMISに司令部要員として派遣) へのインタビュー＞

収録日：平成21年9月2日

Q. スーダンでの具体的な業務について教えてください。

UNMISの軍事部門の司令部に所属し、同軍事部門で活動する軍事監視要員などへの兵站上の支援をしました。具体的には、軍事監視要員が展開するスーダン南部の各セクター（注：UNMISは、スーダン北部にあるハルツームに司令部を置き、また、南部の展開地域は6つの区域（セクター）に分かれ、セクター毎に軍事監視要員や各種部隊が活動）から、活動のために必要な物品の補給に関する報告が定期的に送られてくるのですが、これらの報告をチェックし、各セクターにおける物品補給の必要性をモニタリングして、物品が行き渡るように調整をしました。主にハルツームにある事務所で業務しましたが、ときには、各セクターにも出張し、現場の状況を確認しました。（参考：スーダンの地図（国連HP参照 <http://www.un.org/Depts/dpko/missions/unmis/>））



（インタビューに答える田中二等陸佐）

Q. 現場での状況確認で大変だったことは何ですか？

主にケニアの要員が活動するワウ地域、インドの要員が活動するマラカル地域、バングラデシュの要員が活動するジュバ地域の3つのセクターへ行きました。言葉がなかな

か通じず、また、考え方や文化慣習が異なることから、これらに対応することに苦勞しましたし、特に日本的な仕事のやり方では通じないことが大変でした。

Q. スーダンの情勢が混乱した時はどのように対応しましたか？

任務期間中に、国際刑事裁判所はバシール・スーダン大統領に対する逮捕状を發布しましたが、BBCで報道されたほど現地は混乱していませんでした。しかし、ハルツームの事務所の警備強化のため、事務所周辺の監視所の周りに土のうを積んで、不測の事態に備えるといった対応をしました。私はその土のうの調達に関わり、調達業者に納期を早めるよう働きかけるなどの苦勞をしました。

Q. 田中二佐が考える日本の貢献がスーダンで評価されている理由とは何ですか？

日本人のチームの和を大切にしている行動、つまり、UNMISに従事する同僚や、現地の方への気配りや配慮を伴った行動が評価されている理由だと思います。例えば、私は、“サラーム（こんにちは）”“タマーム？（調子どう？）”等のアラビア語で挨拶をして、UNMISのスーダン人スタッフや現地のスーダン人と仲良くなり、彼らの輪に入り込むよう努力をしました。こうした態度が評価に繋がっているのでしょう。



(UNMIS内のカフェ)

Q. 業務中の経験で印象に残っていることは何ですか？

業務中にうれしい経験をしたことがあります。あるセクターのチームサイト（注：軍事監視要員の活動拠点）へ出張に行った際、そこで活動していたカンボジア軍の要員に、「ありがとう。」と言われました。感謝の理由は2つありました。1つめは、彼はそのチームサイトの兵站担当で、これまで電話等で連絡を取り合う関係だったのですが、ハルツームの司令部にいる私がわざわざ現場に来てくれたことに対する感謝の言葉でした。そして、もう一つは、カンボジアは日本が初めてPKOに要員を派遣した国であり（注：平成4年に国連カンボジア暫定機構（UNTAC）に要員を派遣）、日本の自衛隊員がUNTACを通じ、カンボジアの生活環境を改善してくれたことへの感謝でした。UNTACへ派遣された自衛隊の先輩方の努力が、15年以上も経った現在においても、カンボジアの人から感謝されていることを誇らしく思います。

Q. 田中二佐にとっての平和維持活動とは何ですか？

P K Oは直接的には日本の国防活動ではないように思われがちです。しかし、世界の平和はすなわち日本の平和であるということに思いをいたすべきです。地域や他国の平和を維持するための活動は、日本の平和や国防に繋がっていると考えています。これからも、外に目を向けた自衛隊としての活動を、国内における活動とバランスをとりながら進めていくことが重要だと思います。

<齋藤昌子さん(平成20年12月から平成21年8月現在までUNMIS職員)への電話インタビュー>

収録日：平成21年8月26日

Q. 国連が展開するUNMISではどのような業務があるのですか？

スーダンの南北包括的和平合意(CPA)署名を受けて、政務、軍事、警察、人権、人道支援、DDR(武装解除、動員解除、元兵士の社会復帰)等の部門に分かれ、CPAの履行支援や、難民・国内避難民の帰還促進や調整、地雷除去等を行っています。

Q. 齋藤さんの具体的な業務について教えてください。

選挙支援部渉外広報班に所属し、平成22年4月に予定されている大統領選挙や中央・地方議会等の選挙の実施と、平成23年に予定されている南部の独立を問う国民投票等の実施に向けた支援をしています。業務は大きく分けて主に2つあります。1つめは、広報活動戦略立案の支援で、現地の選挙管理委員会の要請に基づき、選挙に関する広報方法や広報スケジュールを助言します。例えば、有権者・候補者登録、選挙ポスター掲載などのスケジュールや、20年以上内戦が続いたスーダンで、選挙や民主主義を知らない方々のために啓蒙活動を行うこと等を助言します。また、スーダンの選挙制度等が簡単にわかる一般向けの広報資料を作成して、選挙管理委員会に提案します。2つめは、スーダンの政党の能力向上支援です。政党に対して、選挙において守るべき行動規範や、選挙、民主主義についてのワークショップを実施します。政党を登録する現地の機関と共に、このワークショップの準備を行っています。



(UNMI S 車両を運転する齋藤さん)

Q. 業務に際して注意していることは何ですか？

宗教や現地の習慣に配慮することです。私は、主にスーダン北部の首都ハルツームで業務をしています。スーダン南部は主にキリスト教ですが、北部はイスラム教徒が多いので、50度近くの気温でも、肌の露出を控えた服装で働いています。また、ラマダンの時期、一緒に働いているムスリムの方の前では水も食事も摂るのを控えます。



(UNMI S 主催のラマダント食会での齋藤さんとスーダン人スタッフ)

Q. UNMI S に勤務される前と後で、PKO に対する意識で変化したことはありますか？

PKO と聞くと、軍事監視や危険を伴う活動というイメージがありますが、実際は私のような文民が活躍できる場がたくさんあるということです。私のように民間企業で働いた経験が、国際協力の現場では十分活かされます。企業で経験した報道や広報の仕事は、現在の UNMI S での業務内容と重なる点が多くあります。また、特に IT や物流、航空関係で業務経験がある方も活躍できる場です。

Q. スーダンでの生活で最も印象に残っていることは何ですか？

UNMI S のイラク人の同僚に「戦後復興を遂げ発展した日本のように、イラクもいつか復興するんだ。」と言われたことです。現在スーダンの復興に携わっていますが、日本も昔は戦後復興を経験し、発展することに成功した国であることに気づかされました。日本を平和構築の成功例として目指す目標としてもらったことに、日本人として誇

りに思いました。

Q. 齋藤さんは平和構築人材育成事業の修了生ですが、同事業参加希望者へのメッセージも併せ、今後平和構築に関わっていきたい方へのメッセージをお願いします。

PKOに関わる日本人は他国に比べて少ないのが現状です。紛争終結国での仕事を周囲の人に理解をしてもらうことは大変だと思います。しかし、世界では日本の発展を目標に、戦後復興に励んでいる国があることを知り、日本がやってきたことに誇りや自信を持って、日本社会から飛び出して、PKOや平和構築という世界に飛び込む勇気を持ってください。一国の再建、つまり「歴史の一コマをつくる」ことに、少しでも役に立てたらという気持ちで是非飛び込んで欲しいです。

(参考：平和構築人材育成事業参加に関する齋藤さんへのインタビュー
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/peace_b/j_ikusei_trainee.html)

<國井松司一等陸佐(平成20年10月から平成21年7月まで在スーダン大使館防衛駐在官として勤務) へのインタビュー>

収録日：平成21年8月28日

Q. スーダンでの具体的な業務について教えてください。

主に、スーダンの軍関係者やスーダンにある他国の大使館に派遣された駐在武官等との交流などを行う日本大使館の防衛駐在官としての業務と、UNMIS要員として派遣された2名の自衛隊員のサポートです。



(インタビューに答える國井一等陸佐)

Q. UNMIS要員として派遣された2名の方へはどのようなサポートをしましたか?

2名とも若い自衛隊員で、UNMISの職場では様々な国籍の人々と英語で仕事をするため、ストレスが溜まらないよう、常々よく相談に乗っていました。また、スーダンには約50名もの邦人がNGO職員や国連職員として働いています。2名の自衛隊員がこうした異業種の邦人の方々とそれぞれの仕事に関する意見交換ができるような場も

作るようにしました。いざというときに自衛隊員やその他邦人の方々が混乱に巻き込まれないよう、様々な情報源を活用して、安全面に関する情報収集も積極的にしました。

Q. スーダンに対する日本の貢献は高く評価されていると聞きましたが、なぜですか？

UNMISでは、自衛隊員は、イギリス、インド、ロシア、オーストラリア、アフリカ連合加盟国などから派遣された隊員とともに活動をしていましたが、その中でも、例えば、イギリス人の大佐に「日本の自衛隊員のプロフェッショナルリズムに感銘を受けた。」と言われたことがあります。隊員の仕事に対する姿勢が評価されたのでしょう。

Q. 石油利権や民族対立などに起因する衝突が多い地域に行くことはありましたか？

主に日本大使館がある北部首都ハルツームにいましたが、南部のマラカルへ視察に行ったことがあります。アビエ地域（注：南北境界線の画定が問題となる地域）は比較的落ち着いていますが、マラカルは衝突が多く、内戦中に対立していたスーダン政府軍とスーダン人民解放軍で構成された合同統合部隊（JIU：Joint Integrated Unit）が展開しています。日本の自衛隊のプロフェッショナルリズムに関する高い評価を聞いたので、JIUや他の部隊の司令官から、現在日本の自衛隊員が行っている活動以外の内容の支援を行って欲しい旨要請を受けることもありました。

Q. スーダンに赴任する前と後で、国際貢献の手段としてのPKOに対する意識の変化はありますか？

予算と人員が削減される傾向にある一方、自衛隊には日本の国土を守る業務に加え、国際貢献に関する業務を一層行うべしとの期待が近年高まっています。

自分が自衛隊の国際貢献に関連する業務に携わるようになって久しいですが、自衛隊にとっての国際貢献のあり方は多様です。その中の一つとしてPKOへの参加があります。今後も国際貢献の手段として、PKOへの参加を継続するのであれば、派遣される自衛隊員が軍人としての能力を向上させることができるよう配慮すること、例えば、軍事監視要員といったポストに自衛隊員を派遣することも重要ではないかと思えます。

Q. スーダンに勤務して印象に残った出来事は何ですか？

印象に残ったことは2つあります。

1つめは、南部の首都ジュバに行った際、地元産のビールを発見したことです。南部では地場産業がほとんどありませんが、そうした中でも南部スーダンの方が自前でビールを生産することにより、少しでも南部の経済的自立、南部の独立につなげようとしているように自分には思われ、印象的でした。

2つめは、空手の全国大会で演武をしたことです。スーダンでは空手が普及しており、現地の空手愛好家は、日本人の有段者は宗教者に近い高潔な精神を有していると誤信す

るほど、日本人の有段者への強いあこがれがあるようです。大使館員として空手の全国大会で来賓挨拶したら、請われて空手の演武をすることとなり、スーダン全国に放映されました。その後も空手の講座のある大学や現地の知人からの依頼があり、演武を披露したり、現地の子供に空手を教えたりしました。



(空手のスーダン代表ヘッドコーチと演武を披露する様子。右が國井一等陸佐)

みなさん、インタビューにご協力いただきありがとうございました。

<インタビューを終えて>

スーダンで包括的和平合意（C P A）が署名された後、国際社会は、スーダンの平和を維持し、構築するために、協働で試行錯誤を行っています。UNMISへの自衛隊員の派遣や文民の参加は、まさに、国際社会の平和を維持・構築するための貢献です。お話を伺ったみなさんが、押しつけではない、あくまでも現地の方を主役とした平和な国づくりを助けることを信念とし、また、自分がこうした国際貢献活動に携わることで自身や日本に何をもたらすことができるのかを真摯に考え、日本のあるべき国際貢献の姿を探求していらっしゃる事が印象的でした。そして、このインタビューを通じ、PKOなど平和構築の現場で働く人々は、私たちから決して遠い存在ではないことが分かり、このインタビューを読まれる国際協力分野を志す方にとっても励ましとなったのではないのでしょうか。今後ともPKOなどの動向に注目しながら、私も国際貢献のあり方を考えていきたいです。(岩崎)